

ト
レ
イ
ン
ヒ
ー
ロ
ー
・
ヒ
ロ
シ

【登場人物】

安東 ヒロシ（22）コンビニ店員

花村 美月（17）高校生

三島 敦士（24）ヒロシの同僚

松元 俊一（45）コンビニ店長

ニューヒロシ（20）配信者

島根 美佐（48）エリアマネージャー

↓

万引き犯の女（カワナカ）

付き纏いの男

盗撮疑惑の男

駅員

コンビニ客1・2

パチンコ店の客

乗客

○梗概（８００字）

コンビニ店員の安東ヒロシ（２２）は、面倒な事に関わるのが大嫌い。ある日、電車内で盗撮犯を偶然撃退。盗撮犯に追われていた花村美月（１７）から「ヒーロー」と感謝される。翌日、コンビニに訪ねてきた美月から、電車通学で嫌な目に遭っていたことを聞いたヒロシは美月のため一肌脱ぐことになる。

そこへ、万引き常習犯・通称「カワナカ」が来店。ヒロシは良いところを見せてようと、逃げるカワナカにカラーボールを投げて撃退。この様子がSNSで拡散。表彰もされたヒロシは一躍時の人に。ヒロシのファンも現れる。

店長の松元から、研修会で模範社員として講演をしてほしいと頼まれるヒロシ。受験に向けひたむきに頑張る美月の姿に刺激を受け、自身もトレーニングで体を鍛え始める。

講演中、突然黒づくめの男たちがヒロシに襲いかかる。ヒロシはパンチを繰り出し、撃退。会場は「ヒロシ」コールで大盛り上がり。実は男たちは、パフォーマンスのために用意された人物だった。この様子が切り取られ流出、拡散され「ヒロシヤラセ騒動」に。

コンビニに野次馬が押し寄せ大混乱。ヒロシを模倣した迷惑系配信者・ニューヒロシも現れる。身を隠して過ごすヒロシだったが、偶然見かけたニューヒロシの生配信に美月が映り込み、美月が危険な状態にあることを察知。美月のもとへ向かうヒロシ。

駅のホーム、ニューヒロシは盗撮疑惑の男を取り押さえている。男のスマホを取り上げるが証拠は出てこない。「冤罪だとしても平和が守られた」と開き直るニューヒロシ。ヒロシは世間に晒されてしまった男を自分と重ね、スマホを向ける

野次馬たちに、「写真や動画を削除してほしい」と頭を下げる。

ヒロシに幻滅し、その場を立ち去るニューヒロシ。

ヒロシは美月を守れなかった事を謝るが、美月はヒロシが助けに来てくれた事を喜ぶ。「やっぱりヒロシくんはヒーロ―だ」と。

○コンビニ・出入口・店内

レジに立つ安東ヒロシ（22）。

店内にある時計の秒針をぼーっと眺めている。

ヒロシ「55、56、57……」

バックヤードから、段ボールを抱えた

三島敦士（24）がやってくる。

敦士「ヒロシ。暇なんだったらこっち手伝えよ」

ヒロシ「いや、今はちよっと忙しくて……」

敦士「どこがだよ」

万引き常習犯・カワナカが店内へやってくる。

店内を物色している様子。

敦士「おい、あいつカワナカじゃないか？な

あ、今日こそは、店出るタイミングで捕まえようぜ」

ヒロシ「嫌ですよ。万引き犯を捕まえようがほっとこうが、僕の時給が上がるわけでもないですし」

敦士「だとしても、店の平和とお客さんの安全のためにやるべきだろ」

ヒロシ「それも僕には関係のないことです」

ヒロシ、敦士の手から段ボールを奪い取る。

敦士「！」

ヒロシ「じゃ、こっちは僕がやっときますから」

バックヤードに走っていくヒロシ。

敦士「あいつ、いつもあだよなあ……」

呆れ顔の敦士。

カワナカ、知らぬ間に店から出て行っている。

○パチンコ店・店内

騒がしい店内。

真剣な表情でパチンコを打つ、ヒロシと敦士。

なかなか当たりのこないヒロシ。
敦士の台でリーチの演出が流れる。

ヒロシ「え、いいなあ。代わってくださいよ」

敦士「ちゃんと自分の台に向き合って粘れ」

ヒロシ「いくら粘ったってしょうがないんですもん。楽させてくださいよ」

敦士「お前はいつもそうやって楽な方に楽な方につて嫌なことから逃げてるから、何事も上手いかなんだよ」

ヒロシ「こんなところで説教ですか！？敦士さん、ひどいなあ」

敦士「あのな、諦めなかった奴のところにだけ、神様は来てくれるんだよ。パチンコの神様だってそうなんだ」

ヒロシ「神様なら、平等にチャンスを与えて欲しいですけどね」

敦士「集中、集中！」

敦士の台、ハズレの音。

ヒロシ「あーあ……」

がつくり肩を落とす2人。

○居酒屋（夜）

テーブルの上の食事をどんどん食べる

ヒロシ、箸を持ったまま手をつけない

敦士。

ヒロシ「敦士さん、そんなに落ち込まないで
くださいよ。またやれば良いじゃないです
か。ね？」

敦士、箸を置いて、

敦士「あのな、実は俺……正社員になること
が決まったんだ」

ヒロシ「え！昇格試験受かったんですか！？
おめでとうございます。なんでもっと早く
言ってくれないんですか、水臭いなあ。も
っかい乾杯しましょうよ」

ヒロシ、店員に、

ヒロシ「生2つで！」

ヒロシ、つまみを頬張りながら、

ヒロシ「いやあ、本当にすごいですよ。僕に
は無理ですもん」

敦士「コンビニとはいえ正社員になったら責
任も伴うし、頑張らないとなって思ってる」

ヒロシ「応援してますよ」

敦士「俺はお前のことが心配だよ」

ヒロシ「何がですか？僕は敦士さんと一緒に働けてこうして酒が飲めて。なんも不満もないです」

敦士「将来のこと、考えてるのか？」

ヒロシ「僕は何やってもうまくいかないし、毎日なんとなく平凡だったらそれで良いんです」

店員、生ビールを2つテーブルに置く。

ヒロシ「さ、敦士さんの未来に乾杯ー！」

ビールを一気飲みするヒロシ。

ヒロシをじっと見つめる敦士。

○電車内（夜）

ガラガラの車内。

イヤホンをつけて、ロングシートの真ん中に座っているヒロシ。

大きく伸びをして、足を投げ出す。

男がヒロシの足に躓き転ぶ。

ヒロシ「！？」

立ち上がり、呆然とするヒロシ。

男「何してんだよ！？」

男、ヒロシに殴りかかろうとする。

電車が揺れ、転倒する。

同時にヒロシもバランスを崩し、男の上に座り込んでしまう。

男「おい！お前……」

ヒロシ「すいません……」

ヒロシ、立ち上がろうとするが、再びバランスを崩し、男の上に座り込む。

男「おえっ」

いつの間にか、車内に人だかりが出来て拍手喝采。

目を丸くするヒロシ。

○駅のホーム（夜）

連行されていく男。

その場をそっと離れようとするヒロシ。
制服姿の花村美月（17）がやってき

て、ヒロシの腕を掴む。

目を丸くするヒロシ。

美月、深々とお辞儀。

美月「助けてくれてありがとうございます

た！」

ヒロシ「そんな……たいしたことしてないです。つていうか、何が起きたのが自分でも

さっぱりつていうか」

美月「いえ、私にとってはヒーローです」

ヒロシ「え、ヒーロー！？」

美月「見ず知らずの人を助けるなんて、普通出来ることじゃないですもん。もしかして、

警察官とかですか？」

ヒロシ「いやいや、まさか……ただのコンビニ

ニ店員です」

美月「コンビニですか！昼はコンビニ店員、

夜は電車の平和を守るヒーローつてところか

……」

ヒロシ「まあ、この時間に電車乗ることは多いですけど……」

美月「じゃあ、また会えますね」

美月、鞆からノートを取り出すと、何かを書いてちぎって渡す。

ぺこりとお辞儀をして去っていく美月。

ヒロシの手元には名前とLINEのI

Dのメモ。

ヒロシ「え！？」

手元からメモが飛んでいきそうになり、慌ててキャッチ。

急いでポケットにしまおうとするが、手が震えて上手くいかない

しばらく呆然としているヒロシ。

○コンビニ・バックヤード（翌日）

品出しをしているヒロシ。

小さく鼻歌を歌っている。

ポケットから美月のメモを取り出し、

眺める。

ヒロシ「ヒーローかあ……」

敦士がやってきて、

敦士「ヒーローがどうかした？」

ヒロシ「へ、何ですか？」

ヒロシをじろじろ見ながら、

敦士「鼻歌まで歌って、ご機嫌じゃん」

ヒロシ「鼻歌？歌ってませんか？で、何か

ありましたか？」

敦士「お前、女子高生の知り合いいる？」

ヒロシ「女子高生？」

敦士「しかも、可愛い子」

ヒロシ「そんな人いませんよ」

敦士「ヒロシに会いたって来てるけど？」

制服姿の美月、顔を出して、

美月「来ちゃいました」

ヒロシ「！？」

○同・裏口

休憩スペースの小さなベンチに並んで

座るヒロシと美月。

美月の手にはジュース、ヒロシは缶コ

ーヒー。

ヒロシ、チラチラと美月を見る。

美月「LINE、いつくるんだろうって待ってたんです」

ヒロシ「あ……すいません。……なんて送ろうかなって思ってた」

美月「良いんです。もう一度ちゃんとお礼が言いたかっただけなんで」

ヒロシ「そんな！気にしないで良いのに」

2人、飲み物を飲む。

ヒロシ、コーヒーを一口飲んで渋い顔。

美月「……私、今高2なんです。塾で帰りが遅い日が多くて、そういう時間帯に電車に乗ると昨日みたいに付き纏われたりして」

ヒロシ「そう、なんですか……」

美月「親も共働きで夜遅いから、お迎えとかも頼めなくて」

ヒロシ、美月の鞆を見つめる。

教科書や参考書でパンパン。

手にはペンだこ。

ヒロシ「……ああいう人、よくいるの？」

美月「うん。でも、ある程度はしょうがない
って諦めてます」

ヒロシ「しょうがない……？」

美月「もう慣れたっていうか、中高一貫なん
で電車通学長いんです。開き直った方が楽
なこともあるなあって」

ヒロシ「ちよっと分かるかも。僕も楽な方が
良いなって」

美月「ですよね？だけど、たまーにしんどい
なって時もあって、昨日はそんな日だった
けど、ヒロシさんのおかげで嫌な1日にな
らずに済みました」

ヒロシ「（僕もだ）」

美月「ヒロシさんみたいな優しい人に出会え
て良かった」

ヒロシ「僕が優しい？」

美月「うん。今まで出会った人のなかで一番
かも」

目を丸くするヒロシ。

ヒロシ「……僕で良ければ力になるよ」

きよとんとする美月。

ヒロシ「あ、もちろん勉強とかは無理だけど、塾とか勉強で帰り遅いんでしょ？1人だと怖くなって時とか！いつでも呼んでよ」

美月「本当に？嬉しい！」

にっこり微笑む美月。

ヒロシ、美月の手を握ろうとする。

店に向かっていくカナカの姿が見える。

ヒロシ「あ！」

美月「どうしたの？」

ヒロシ「あいつ、万引き常習犯なんだよ。いつも逃げられてばかりで、他のコンビニとかスーパでもやってるらしくてさ」

美月「ヒロシさんみたいな人でも捕まえられないなんて……」

ヒロシ「ちよつと行ってくる！」

店の中へ走っていくヒロシ。

その場に残される美月。

店の入り口の方を見つめる。

○同・店内

キヨロキヨロと店内をうろつくカワナカ。

慣れた手つきで商品を次々と鞆の中に入れていく。

バックヤードからやってきて、カワナカの背後を静かに追うヒロシ。

○同・出入口

裏口から回ってきた美月。

ヒロシを探してキヨロキヨロしている。
何かを見つけてはっと目を見開く。

○同・店内

店の外に走って出ていく女。

ヒロシ、女を追う。

ヒロシ「止まれ！」

足元に、カラーボールを投げる。

女「！？」

女の足元にオレンジ色の塗料が広がる。
騒ぎを聞きつけて人が集まってくる。
警察官が駆けつけてくる。

肩で息をするヒロシ。

ヒロシの一連の様子をスマホで撮影している美月。

美月「すごい……やっぱりヒーローだ！」

目を輝かせてヒロシを見つめる。

○SNSの投稿画面／コメント欄

万引き犯を撃退するヒロシの動画。

どんどん「いいね」が増え、『迷惑客
成敗ニキ』として拡散されていく。

『こいつと地元一緒です』のコメント
とともに、ヒロシのフルネームや卒業
アルバムの写真も拡散されている。

○学習塾・自習室

スマホを見ている美月。

どんどん拡散されていくヒロシの動画

である。

満足そうに微笑む美月。

テーブルには、ノートが置いてある。

『地域を悩ませる万引き常習犯を撃

退！』の見出し。

感謝状を授与されているヒロシの姿が
掲載された新聞記事の切り抜き。

○コンビニ・店内

ヒロシの感謝状や、新聞の切り抜きな
どが『ストップ、犯罪行為！』『万引
きは犯罪です』のPOPなどと一緒に
飾られている。

スマホで撮影をする人で溢れ、混雑し
ている。

○同・裏口

出勤してくるヒロシ。

青年が満面の笑みで走ってくる。

青年「あの！ファンです！握手してもらって

も良いですか！？」

ヒロシ「え、あ、うん」

ヒロシの手を取り、ブンブン振る。

青年「ヒロシさんの動画……痺れました！俺、動画配信とかもやってるんですけど、ああいうスカッと系もいいなって思ってたんすよね」

ヒロシ「僕は動画配信してるわけじゃないけど……」

青年「正義のために動ける人ってのが、ほんとに憧れます」

ヒロシ、頭を掻きながら、

ヒロシ「そうかな？ありがとう……」

青年「あ、写真も一緒に良いすっか？」

自撮りで2ショットを撮る。

ヒロシ「俺、ヒロシさんみたいになれるように頑張ります！」

笑顔で立ち去る青年。

敦士、いつの間にかヒロシの背後に立って、

敦士「すっかり有名人だな」

ヒロシ「いやあ、そんなことないっすよ」

敦士「なあ、顔バレして怖くねえの？」

ヒロシ「なんの問題もないですよ。あ、敦士

さんとも写真撮りましょうか？」

敦士「はあ？撮るわけねえだろ」

ヒロシ「僕と一緒に写真をSNSに載せたら、

敦士さんもバズっちゃいますよ」

敦士「またまたあ」

敦士、スマホを取り出し、ヒロシと自撮りする。

○同・事務所内

店長の松元俊一（45）とヒロシ。

ヒロシ、チラシを眺めている。

『若手社員研修会』『模範社員による講演』とある。

ヒロシ「これに登壇するんですか？僕が？」

松元「もともと三島くんを予定していたんだけれど、ぜひ安東くんという話になって

ね。万引き常習犯を捕まえたことは他の社員にとっても良い刺激になるだろうって」

ヒロシ「でも……僕バイトですよ？」

松元「実はエリアマネージャーから、社員登用の話が出てるんだ」

ヒロシ「正社員？でも、試験があるんですよ。僕には無理です……」

松元「めざましい成果を収めた人には、試験免除する特例制度があるんだ。例えば、万引き犯を捕まえた、とか」

ヒロシ「それってつまり僕も？」

松元「どう？悪い話じゃないと思うけど。研修会にはエリアマネージャーも来るんだ」

ヒロシ「（少し考えて）行きます」

○駅前のコーヒーチェーン店（夜）

勉強をしている美月。

ペンだこが痛いのか、鉛筆の持ち方が
いびつである。

美月を見守っているヒロシ。

ヒロシ、アイスコーヒーを飲んでいる。

机の上のガムシロップをそわそわと触っている。

美月、顔を上げて、

美月「ごめん、退屈だよね？」

ヒロシ、首を振り、

ヒロシ「大変だね」

美月「受験って楽じゃないんだよね。私別に天才でもないし、成績も良くないから、頑張らないといけないんだ」

ヒロシ「夢に向かって一所懸命ですごいよ」

美月「……私、夢なんてないよ」

ヒロシ「でも、こんなに勉強頑張ってるでしょ？」

美月「どこの大学へ行きたいとか、何を勉強したいとか、全然分かんない。親はきちんと大学に行って、働いて欲しいって思ってるみたいけど」

ヒロシ「それも立派な夢じゃないの？」

美月「親のね。私は私のやりたいことを見つ

けたい」

ヒロシ「そつか……」

美月「ヒロシくんは？将来の夢は何？もう叶った？」

ヒロシ、少し考え、

ヒロシ「どうだろうなあ……」

美月「ヒロシくんは仕事もして、人助けもしてるじゃん。正社員になれるかもしれないんだよね？すごいよ。尊敬する」

ヒロシ「そうかなあ？」

美月「私はまず夢を見つけないきやだ……」

ヒロシ「焦らなくても、美月ちゃんならすぐに見つかるよ」

美月「ありがとう。ヒロシくんに言われると説得力ある」

小さく笑うヒロシ。

ヒロシ「あ、そうだ」

ポケットから小さな包みを取り出して、
美月の前に置く。

美月「……これは？」

ヒロシ「開けてみて」

美月が包みを開けると、そこにはシャープペン。

ヒロシ「あ、あのね、たまたま文房具屋で見かけたんだけど、グリップが柔らかくて、ペンだこが出来にくいタイプなんだって。試験当日は鉛筆かもしれないけど、たまにはよければ使ってみて」

美月、ペンだこをそっと隠して、

美月「気付かれてたんだ……恥ずかしいな」

ヒロシ「どうして？ 美月ちゃんが頑張ってる証拠だよ」

美月「ありがとう。毎日使うね。大事にする」

ヒロシ、にっこり微笑む。

アイスコーヒーを飲み、眉をひそめる。

○ 駅前の公園（夜）

ベンチに寝転んでいる敦士。

隣にある鉄棒で懸垂をしているヒロシ。
敦士、ヒロシを訝しげに見ながら、

敦士「急にどうした？」

ヒロシ「いつ何が起きるか分かんないじゃないですか？だから備えとかないって」

敦士「そんな頻繁にカワナカみたいなやつが店に来たら困るけどな」

ヒロシ「そういえば、今後若手社員研修会に参加することになったんです！しかも、正社員になれるかもって。びっくりじゃないですか？」

敦士「え……？」

ヒロシ「敦士さんには一番に言いたくて。研修会も初めてだから楽しみだなあ」

敦士「あんなに興味ないって感じだったのに、すっかり前向きだな」

ヒロシ「そりゃあ……僕だって無条件で正社員になれるなら良いかなって。安定した生活を保障されるわけですし。就活で手に入らなかったものだし……」

敦士「ふーん……お前にはもっと別の道がありそうだけど」

ヒロシ「……敦士さんは夢ありますか？」

敦士、起き上がって、

敦士「俺は正社員として頑張ることとで精一杯だよ」

ヒロシ「すっかり敦士さんも副店長の顔してますね！僕の勇姿を見せたかったですよ」

敦士「……」

ヒロシ、鉄棒から降りてボクシングのパンチの素振り。

ヒロシ「僕も敦士さんと肩並べて一緒に働けるように、頑張りますね！」

敦士「……一緒には無理なんだよ」

ヒロシ、パンチに集中していて聞こえていない。

敦士「なあ、せっかく動画でバズったんだから、そっち方面で頑張ったら？」

ヒロシ「どうしてですか？別に僕が動画を作ったわけじゃないですし」

敦士「俺たちで組んで動画作らねえ？」

ヒロシ「……動画って？」

敦士「動画配信はレッドオーシャンだけど、
バズれば楽しめている程度は稼げるらしい。
な？ どう？」

ヒロシ、素振りを止める。

敦士「コンビニの正社員なんて、お前には向
いてねえって。ヒロシらしく楽出来る方法
探そうぜ？」

ヒロシ「僕らしいって何なのかわかんないで
すよ。別にバズりたくてやったわけじゃな
いですし、正社員になれるもんなら、なり
たいですし」

敦士「ムキになんなよ……ちよっと提案した
だけだろ……？」

ヒロシ、敦士に背を向けてパンチを繰
り出す。

○研修会場・入口

中規模のホール。

『若手社員研修会』の看板がある。

○同・ホール内

満席の会場。

舞台上に登壇するヒロシ。

スーツ姿で緊張の面持ち。

手元にはカンペ。

『深呼吸！美月』の付箋がついている。

深呼吸するヒロシ。

マイクに向かい、一礼。

後方の扉が開いて、黒ずくめの男が2人駆け込んでくる。

ヒロシ「！？」

騒然とする客席。

男たちが舞台上のヒロシに向かってくる。

ヒロシ、とっさにボクシングの構え。

一心不乱パンチを繰り出す。

男たちをノックアウトし、撃退する。

連行されていく男たちを呆然と見つめるヒロシ。

大盛り上がりの客席。

スマホで撮影している者や歓声をあげる者。

客席で「ヒロシ！」「ヒロシ！」のコールが響く。

○同・控室

ヒロシと松元。

エリアマネージャーの島根美佐（4

8）、黒ずくめの男2人が部屋に入ってくる。

2人の男は、ヒロシに殴られたところをさすっている。

島根、ヒロシに拍手を送る。

島根「あなたすごいわね。期待通り、いやそれ以上だった。リアル撃退ショーって感じで大興奮！」

ヒロシ「実は最近トレーニングを始めたんですけど、さっそく成果を出せて良かったです！」

松元「島根さんに、安東くんの素晴らしい活

躍をお見せ出来て良かったです！」

ヒロシ「事前に言ってもらえたら、もったか
っこ良く出来たかもしれないです」

島根「万引きや強盗は、事前に打ち合わせな
んでやってくれないでしょう？突然のこと
にどれだけ対応出来るか見たかったの」

ヒロシ「それでこのパフォーマンスを？」

島根「その通り。こんな逸材が隠れてたなん
てね。近々、正社員登用の件で連絡が入る
と思うから、これからも店のために力を貸
してね」

島根、ヒロシの肩をポンと叩く。

ヒロシ「ありがとうございます！」

松元「さ、広報用に写真撮影をしましょう！
みなさん並んでください」

ヒロシ、男たちと肩を組む。

松元「笑って、笑って！ハイ、チーズ！」

満面の笑みで写真に収まるヒロシ。

○公園（夜）

1人、ランニングをしているヒロシ。

苦しそうだが、楽しげ。

ヒロシ「よっしゃー！！！」

スピードを上げて走る。

○コンビニ・事務所内

電話対応をしている松元。

松元「申し訳ございませんが、ご意見はお客様相談室がありますので……はい。はい。

ですから、そのような事実は一切ございません……」

松元、受話器を置き大きなため息。

ヒロシ、入ってくる。

ヒロシ「僕、レジ入りますね」

松元「ああ、安東くん。今日は急なんだけど、休んでもらえる？」

ヒロシ「え？でも、今日人少ないですよね？」

松元「こっちのことは気にしないで大丈夫だから。とにかく早く帰って」

ヒロシ「何があったんですか？」

松元「……流出したんだ」

ヒロシ「流出？」

敦士が入ってくる。

手にはヒロシの表彰状や写真、POP
が、雑に詰めこまれた段ボール。

敦士「とりあえず片付けました」

と、段ボールを松元に手渡す。

松元「ありがとう」

雑に部屋の隅に置く。

ヒロシ「あの、流出ってなんの話ですか？」

敦士、ヒロシをチラッと見て、

敦士「店長、店の前も人が溢れててめっちゃく

ちやな状態です……」

松元「とりあえず、近隣に迷惑かからないよ
うに。あと、店の中には入らせないで」

扉が開いて、客たちが押し寄せてくる。

ヒロシ「！」

ヒロシに一斉にスマホを向ける。

客1「炎上してるヤラセ動画について一言お
願いします！」

客2「今までの撃退も全部嘘だったんです

か？」

スマホ画面をヒロシに向ける。

黒づくめの男と肩を組んで笑っている

ヒロシの写真である。

○カフェ・店内

スマホで動画を見ている女子高生2人
組。

○画面／ヒロシの突撃動画（コンビニ）

ヒロシの発言部分が切り取られ編集さ
れている。

押し寄せてきた客たちでもみくちやに
なるヒロシ。

ヒロシ「ヤラセって……一体何の話なんです
か？」

× × ×

ヒロシ「違います……僕は研修会に参加した
だけで何もしていません……」

顔を必死に覆うヒロシの姿。

○ 戻って、カフェ・店内

女子高生たち、笑いながら「拡散」ボタンをタップ。

すぐ近くの席で息を潜めるヒロシ。

キャップを深く被り直す。

足早に店を後にするヒロシ。

○ 駅のホーム

ホームの端で電車を待つヒロシ。

キャップを何度も被り直している。

周りの人にヒソヒソされている。

ヒロシに近づきスマホを向ける人も。

○ 道

キャップにマスク、パーカーのフードを深く被ったヒロシ。

あたりをキョロキョロ見渡しながら歩いている。

○パチンコ店前

店の前で仁王立ちの美月。

俯いたままのヒロシ、美月に気がつかず店に入ろうとする。

通せんぼする美月と正面衝突。

ヒロシ「あ、すいませ……」

美月「ねえ、ニューーヒロシって知り合い？」

ヒロシ「ニュー……誰？」

美月「ヒロシくんの偽物！ひどいんだから、ほら見てよ」

美月、スマホをヒロシに向ける。

ヒロシ、目をそらして、

ヒロシ「それどころじゃないんだ」

美月、呆れて、

美月「これ以上に大事なことがあるの？」

ヒロシ「今は出来るだけ目立ちたくない……」

何もしてなくてもこんな状態なのに」

美月「どうして？戦いに行こうよ！偽物と直接対決！」

ヒロシ「僕、炎上してるんだって」

美月「……ヤラセ動画のこと？ほっといたら
良いじゃん。あんなの嘘だって、誰が見て
も分かるもん」

ヒロシ「知ってたんだね」

美月「うん……結構拡散されてるから。でも、
目立ってラッキーってくらいに思ったら良
いよ！」

ヒロシ「当事者じゃないからそんなふうには
気なこと言えるんだよ」

美月「私だって、私なりに分かろうとして
る！だから、こうしてここに來たわけだし
……」

ヒロシ、美月の顔をじっと見て、
ヒロシ「ていうか、なんでこの場所知ってる
の？」

美月「……？」

ヒロシ「このこと、美月ちゃんに話したこ
とあったっけ？」

美月「もしかして、私のこと疑ってる？」

ヒロシ「……研修会のこと、美月ちゃんにしか言っていない」

美月「ねえ、私を助けてくれたかったいいヒーローはどこに行っちゃったの？私が憧れた優しくて強いヒロシくんは？」

ヒロシ「動画見たんでしょ？あれば僕なんだよ」

美月「だから、あれはヤラセだって……」

ヒロシ「ヤラセとか、そんな言葉で括らないで！」

呆然とする美月。

美月「……もういい。私、一人でやるから」

ヒロシ「……何を！？」

美月「ヒロシくんには関係ない！」

美月、早足で去っていく。

ヒロシ、しばらく美月の後ろ姿を見つめる。

美月の姿、どんどん小さくなり、やがて視界から消えていく。

○パチンコ店内

騒がしい店内。

隅の席にいるヒロシ。

ぼーっとパチンコを打っている。

近くを人が通るたびにビクツとするヒロシ。

ヒロシ。

ヒロシの近くの席、スマホで配信を見ながらパチンコをしている人の姿。

ニューヒロシの配信動画である。

○画面／ニューヒロシの配信（駅のホーム）

ニューヒロシのアップの自撮り。

ニューヒロシ「悪を成敗するヒーローこと、

ニューヒロシです。絶賛炎上中のヤラセ

ヒロシに代わって、これからは俺が平和を

守りまーす！」

アウトカメラに切り替わり、走り出す

ニューヒロシ。

歩いている若い男の肩を掴む。

ニューヒロシの声「おい、お前」

男「は？何ですか？」

ニューヒロシの声「さっき盗撮してただ

ろ？！」

男を地面に押し倒し、馬乗りになる。

ズボンのポケットからスマホを奪う。

ニューヒロシの声「証拠品を押収しました！」

カメラに向かって笑顔。

美月の声「ちよっと！待ちなさいよ！」

カメラが大きく動き、声の主を捉える。

美月の姿である。

○戻って、パチンコ店内

立ち上がり、配信動画を見ている人の

スマホに顔を近づけているヒロシ。

画面に美月が映っている。

ヒロシ「美月ちゃん！？」

客「あんた、なんすか？」

ヒロシ、走って店を出ていく。

誰もいなくなった台で当たりの音が流れ、玉が溢れ出る。

○ 駅のホーム

野次馬が集まり、人だかりが出来ている。

中心にはニューヒロシと美月の姿。

美月のそばには男がうずくまっている。

「ニューヒロシ！」 「ニューヒロシ！」
のコールが響く。

駆け込んでくるヒロシ。

目を丸くする美月。

美月 「ヒロシくん！？」

ニューヒロシ 「え？ マジで来たんだ？」

「ヒロシだ」「どの面下げて」とヒソ

ヒソ声。

ニューヒロシ 「あんな炎上してるのに、こんな堂々と顔出しして大丈夫なんですかあ？」

ニューヒロシ、カメラをヒロシに向ける。

フードで顔を隠し、俯くヒロシ。

男 「ねえ、ヒロシなんでしょ？ こいつのこと

も撃退してよ！俺を助けてよ！」

俯いたまま動けないヒロシ。

野次馬もスマホを向けている。

ニューヒロシ、ヒロシに近づいてくる。

ヒロシの手を取り、

ニューヒロシ「ね、俺のこと覚えてる？」

首を横に振るヒロシ。

ニューヒロシ、ため息をつく。

スマホ画面を見せる。

ヒロシとニューヒロシの2ショット。

コンビニの裏手で撮影したもの。

ハッとするヒロシ。

× × ×

（フラッシュ）

青年「あの！ファンです！握手してもらって

も良いですか！？」

× × ×

（フラッシュ）

ヒロシ「俺、ヒロシさんみたいになれるように頑張ります！」

× × ×

ヒロシ「あの時の……」

ニューヒロシ「自分のファンの顔も覚えてないなんて最低だな」

ヒロシ「本当にファンだったら、こんなことするわけない」

ニューヒロシ「本気で好きだったのに。憧れてたのに。あんなくだらないヤラセ動画作るなんて幻滅した」

ヒロシ「あれは僕じゃない！」

ニューヒロシ「別の動画でも釈明してたよ

ね？そうやって言い訳するのもダサイ」

ヒロシ「……そもそも僕は正義のヒーローでもなんでもない」

ニューヒロシ「ま、どっちでも良いよ。これからは俺が悪を成敗するんで、見といてよ」

ニューヒロシ、うずくまっている男の顔にスマホを近づける。

ニューヒロシ「パスコードは？」

うずくまったまま動かない男。

ニューヒロシ「早く解除しろって！」

美月「ちよつと、やめなさいよ！」

美月割って入って、ニューヒロシの腕を掴む。

ニューヒロシ「お前はさっきから何なんだ

よ！？あ、よく見たら可愛いじゃん。ヤラセの嘘つき野郎じゃなくて、俺にしとかな
い？」

美月、ニューヒロシの腕に噛みつく。

ニューヒロシ「！？」

突き飛ばされる美月。

シャープペンが転がる。

ヒロシ「美月ちゃん！？」

ヒロシ、美月のもとへ駆け寄る。

ニューヒロシ「そうやって女のこと helper
んだ？みなさん見ましたかあ？」

ニューヒロシ、ヒロシの方へ向かう。

シャープペンを踏みつける。

割れたシャープペンを見つめるヒロシ。

ヒロシ「……やめろよ」

ニューヒロシ「はあ？それはこっちのセリフ
なんだけど。反吐が出る」

男、隙について逃げようとする。

ニューヒロシ、男を捕まえて、馬乗り
になる。

男「ひい！」

ヒロシ「……その人が盗撮をした証拠はある
の？」

ニューヒロシ「被害者もいるんだよ？それに
目撃者も。分かってんの？」

ニューヒロシ、野次馬の方を指指し、
ニューヒロシ「ねえ、見たんだよね？あんな
も、あんなも。確かに見たって言ってたよ
な？」

野次馬たち、それぞれ小さく頷く。

ニューヒロシ、男の胸ぐらを掴み、

ニューヒロシ「ほらな？さっさとスマホ見せ
ろよ。な？そしたら早いだろ」

男、震える手でパスワードを解除する。
ニューヒロシ「やれば出来るじゃん」

男のスマホを操作するニューヒロシ。

ヒロシ「勝手にそんなことするなって……」

写真フォルダをスクロールしていく。

ヒロシ「なあ、聞いてるのか？」

ニューヒロシ「……」

ニューヒロシ、スマホの画面をひたすらスクロールしていく。

どんどんスピードが速くなる。

ニューヒロシ「何だよ……」

男「ほら！何にも出てこないですって！やってないんだから！これで分かったでしょ？」

ニューヒロシ「あー、消したってことね？そうやって証拠隠滅して、逃げようたってそうかいけないから」

ニューヒロシ、男に殴りかかろうと腕を振り上げる。

ヒロシ、ニューヒロシの腕を掴んで止める。

ニューヒロシ、立ち上がり、ヒロシと向かい合う。

ニューヒロシ「邪魔すんな」

ヒロシ「……もうやめろろ。あんたが間違っ
てたんだって認めなよ」

ニューヒロシ「はあ？俺は正義なんだから、
間違うはずない。犯罪者を見極めて成敗し
てるの。なんでやめろなんて言われないと
いけないわけ？ねえ？みなさん、どう思
います？」

ざわざわする声。

ニューヒロシ、周りを指差す。

若い女性、親子連れ、老人。

ニューヒロシ「あの人も、その人も、この人
も。俺はみんなが困っていたら助けたい。
そのためにどうする？あんたみたいに何に
もしなかったら、犯罪に巻き込まれるぞ？」

「ニューヒロシが正しい！」「ヒロシ
がうせろ！」などの声。

ニューヒロシ「お前の可愛いお友達だって危
ない目に遭うかもしれない。そうだろ？
な？痴漢、盗撮、あるだろ？1回くらい」

美月、俯く。

ニューヒロシ「これが俺のやり方なの。あんたみたいにヤラセなんかしないし、正しく平和を守ってやるから」

ヒロシ、男を指差す。

うずくまったまま泣いている。

ヒロシ「じゃあ、この人は？」

ニューヒロシ「は？こいつが何？」

ヒロシ「こんなたくさんの人の前に晒されて、言われもない罪を着せられようとしてる。

それは良いの？この人のことは守らないの？」

ニューヒロシ「何言ってるの？怪しい行動する奴が100パー悪いだろ？」

ヒロシ「でも、今は証拠がない。もし冤罪だったら責任取れるの？」

ニューヒロシ「冤罪だったらそれはそれで良いだろ。平和が守られたってことなんだから」

ヒロシ「でも、この人は一生傷つく。拡散さ

れた動画は消えないし、自分が思ってもみないような解釈をされてしまう。どこにいても、何をしていても、視線を感じて、笑われて。すごく苦しくて辛い。みんなに釈明をすることだって出来ない……釈明出来たとしても、それがどこまで伝わるか……」

ヒロシ、野次馬を見渡して、

ヒロシ「だからお願いです。みなさんが撮った動画や写真を削除してください。もしどこかに投稿したのなら、それも消してください。少しでも、傷が浅く済むように、この人のために。どうか……よろしくお願いします」

頭を深く下げるヒロシ。

美月、ヒロシの隣にやってきて、一緒に頭を下げる。

戸惑いながら、写真や動画を消す人。

そのヒロシの様子を撮り続ける人。

ニューヒロシ、あたりを見渡して、

ニューヒロシ「こいつらが消したところで意

味ないだろ。この様子も配信されてて視聴してる人がいて、どんどん拡散されてんの。一旦始めたら止められないんだよ。こいつが怪しい行動したのが悪い。俺は間違っていない。だから、このやり方で犯罪者をこれから成敗するから」

ヒロシ「いつか痛い目に遭うよ」

ニューヒロシ「あんたとは分かち合えない。憧れも、尊敬も、撤回するわ。ニューヒロシって名前ももういらね」

ニューヒロシ、スマホのヒロシとの2ショット写真を削除する。

ヒロシ「こっちだって願ひ下げ。もう関わらないでください」

ニューヒロシ、ヒロシを睨み付ける。

警察官がホームへ駆け込んでくる。

美月、ニューヒロシの方を指し、

美月「この人です！この人を連行してください！暴力を振るったんです！」

ニューヒロシ、ホームに到着した電車

に走って乗り込む。

美月「あ！待ちなさい！」

走って追いかけるが、電車が発車する。

電車内から手を振るニューヒロシ。

人だかりはいつの間にかまばらになっている。

閑散としたホームに取り残されるヒロ

シと美月。

駅員に連行される男。

ヒロシと美月に一礼する。

男の後ろ姿をしばらく見つめる2人。

その場に座り込む美月。

ヒロシ、美月の肩をポンと叩く。

○公園（夕）

ベンチに並んで座るヒロシと美月。

美月の手に絆創膏を貼るヒロシ。

ニコニコ見つめる美月。

ヒロシ「……ごめん」

美月「何が？」

ヒロシ「流出のこと疑って。あと、1人で怖い
思いさせて、それから……」

美月「来てくれたじゃない？」

ヒロシ「え？」

美月「嬉しかった」

ヒロシ「でも、守れなかった。怪我也させち
やったし」

美月「こんなのすぐ治るよ。擦りむいただけ」

絆創膏を貼った手を見せる。

ヒロシ「怖くなかったの？」

美月「うん。ヒロシくんの偽物なんて許せな
いって気持ちが強かったから」

ヒロシ「……ありがとう、僕のために」

美月「ヒロシくんもカッコ良かったなあ」

ヒロシ「え？どこが？」

美月「あんな大勢の前で頭を下げるなんて、
なかなか出来ることじゃないよ。しかも、
名前も知らない人のために」

ヒロシ「……とても他人事には思えなかった。
きつとあの人は僕と同じくらい辛い目に遭

うだろうから。名前や勤務先や、家だって
すぐに晒されるかもしれない」

美月「少しでも拡散されないと良いんだけど」

ヒロシ「うん……」

美月「あ、そうだ。私、将来の夢決まったんだ」

ヒロシ「本当に？良かった！どんな夢？」

美月「……弁護士」

ヒロシ「すごい、立派じゃない！」

美月「色々調べてたんだけど、事件だけじゃなくて、日常の困りごとを解決するとか、
そういう役目もあるんだって。それこそS

NSでの誹謗中傷とか」

ヒロシ「……知らなかったな」

美月「私ね、ヒロシくんみたいに誰かを助ける人になりたいなって思ったんだ」

ヒロシ「僕はみんなを助けられるような人間じゃないよ」

美月「今日、あの場でたくさんの人の心を救ったと思う。あの男の人も、カメラを何と

なく向けていた人も、もしかしたらニュー

ヒロシだって」

ヒロシ「そうだったら良いんだけど……」

美月「私も、ヒロシくんみたいに、人の心の痛みが分かる人になりたい。寄り添ってあげられるような強くて優しい人に」

ヒロシ「美月ちゃんならきつとなれるよ」

美月「私がたくさんの人を助けるから、ヒロシくんは私を守ってくれる？」

ヒロシ、目を丸くする。

美月「答えは？」

ヒロシ「もちろん。美月ちゃんのことには僕が絶対に守るよ」

美月「やっぱりヒロシくんはヒーローだ。最初に会った時だって、見ず知らずの私を助けてくれたんだもん」

ヒロシ、しどろもどろになって、

ヒロシ「あ、あれは……実は、えっと……」

美月「喉渴いちゃった。飲み物、飲まない？」

ヒロシ「え？あ、うんそうしようか」

ヒロシ、ジュースとコーヒーを取り出す。

にっこり微笑み、コーヒーを手に取る

美月。

きよとした顔のヒロシ。

美月「分かってる。ゼーんぶ分かってるんだから」

ヒロシ、美月を見つめる。

美月「それでも、私を守ろうとしてくれたヒロシくんが強くて優しくて、好きなんだよ」

美月、コーヒーを一口飲んで、

美月「そうだ！今から行こう！」

ヒロシ「え、どこに？」

美月「コンビニ！炎上のせいでもしクビにされたら不当解雇なんじゃない？動画や写真の流出も問題だと思うんだよね。私、ヒロシくんのために戦うから！」

ヒロシ、笑って、

ヒロシ「もう立派な弁護士だね」

美月「当たり前じゃん」

ヒロシ「でも、美月ちゃんは塾に行かないとね。そろそろ時間でしょ？」

美月「えー？今日くらいは休んでも良いんじゃないかなあ？」

ヒロシ「ダメダメ」

美月を引っ張り立ち上がらせる。

美月「でも、もし本当にクビになってたら……」

ヒロシ「大丈夫だって。きっと話せば分かってくれるはずだし」

美月「そうかなあ？ヒロシくん優しいから言いくるめられないか心配だよ……」

ヒロシ「ちゃんと塾まで送り届けるからね？」

サボろうとしないように」

美月「え、バレた？」

ヒロシ、美月の手を取る。

目を丸くする美月。

駅に向かって歩き出す2人。

夕日が沈み、2人の影が伸びる。

（おわり）

